

Letters

Arpak

レターズアルパック

VOL.206 ISSN 2432-5295

特集「スポーツ」

CONTENTS

- ◆特集：【スポーツ】…01
 - ・自治体によるスポーツ施策と働き盛り世代のスポーツ事情…02
 - ・地域に愛される王道のチームスポーツ「バレーボール」…03
 - ・ヒルクライム大台ヶ原 since2001…03
 - ・自然を体感できる自転車の魅力…04
 - ・しま山登山のススメ…04
- ◆今、こんな仕事しています…05～08
- ◆近況&イベントのお知らせ…09～10
- ◆まちかど…裏表紙
 - ・傘の花が咲き、虹の橋がかかった桂ヴィレッジフェス

(写真) 京都マラソン 撮影：石井努



特集 「スポーツ」

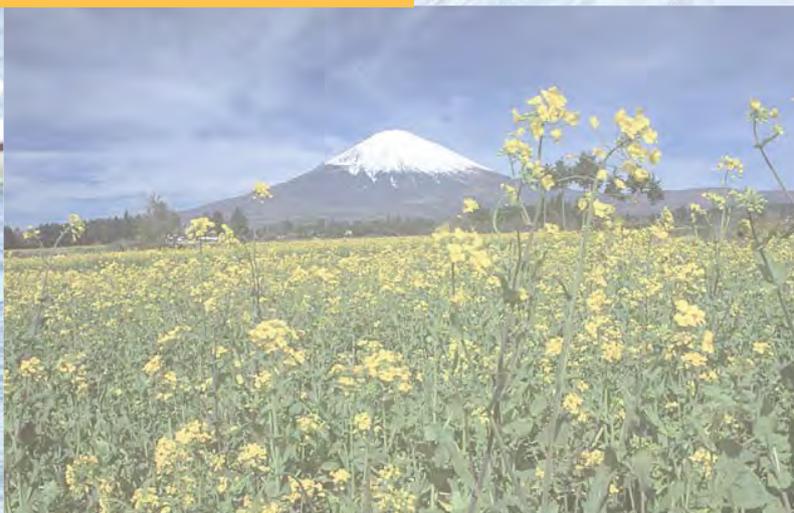
まちづくりの究極の目的の一つは人々の QOL (Quality Of Life) を高めることでしょう。心身の健康は QOL とも深く関係があります。近頃はコンパクトシティの考え方ともなじみの良い、歩いて暮らせるまちづくりを標榜するまちも多くなりました。これにはまちなかで歩く機会を生み出すことによる健康づくりへの効果も期待されています。

スポーツは日本語でいうと運動競技。運動の技術や能力についての一定ルールに則った競技のことだそうです。ポイントは「競技」という点、つまり競う相手や仲間が必要なことです。世界中からアスリートが集まる 2020 年の東京オリンピックに向けて、当分はスポーツ熱も高まり続けることでしょう。

ところで、身につける ICT 端末、いわゆるウェアラブルデバイスは Apple Watch の発売以降、急速に利用が広まりつつあります。ランニングやウォーキングの時間や距離を管理したり、心拍数や歩数を記録したり。仲間と競い合う機能なども人気ようです。スポーツの SNS 化です。

スポーツの楽しみ方は、プレイヤーになって競い合うことだけではなく、健康づくりとしての取り組みや観戦する楽しみもあります。SNS 化したスポーツではつながり合うという、従来とは違った楽しみ方もできそうです。スポーツとまちの関係も多様な観点から考える必要がありますね。

編集委員会



自治体によるスポーツ施策と

働き盛り世代のスポーツ事情

石井努
地域再生デザイングループ

自治体が策定するスポーツ推進計画の策定支援やスポーツに関連する業務について、レターズ201号でご紹介しましたが、こうした業務は、今後増えてくると思われます。

今年度、アルパックでは、奈良県、岸和田市、三田市のスポーツ推進計画の策定、滋賀県の国体会場選



名古屋名城公園ランニングステーション

定調査としてライフフル射撃場の検討調査を受託しています。

今年の3月に国から、「人生」が変わる!、「社会」を変える!、「世界」とつながる!、「未来」を創る!とスローガンが打ち出され、第2期スポーツ基本計画が改定されたことや、2020年には東京オリンピック・パラリンピックを控えていることもインパクトとなり、各自治体でスポーツ推進計画策定や改定の動きが活発になっています。

これらの計画では、スポーツの実施率を指標に掲げるケースが多くなってきています。スポーツ実施率については、各地の統計等から年齢別に共通した傾向がみられ、ほとんどの地域で高齢者層は比較的实施率が高く、我々のような働き盛りの世代の実施率が低くなっています。

実施率が低い原因として、住民アンケート等からは、「子育てに忙しい」、「仕事が忙しい」といった理由が共通してあがっています(我々にとっても耳が痛い結果です)。一方で、「スポーツに取り組みたい」という意識も強く、多くの人がジ



名古屋ミッドランドスクエア 車椅子テニス走行体験

レンマをもって日常生活を送られていることがうかがえます。

実施率を高めるため、働き盛りや子育て世代が、こうしたらスポーツに取り組むことができる環境をつくることのできるのか、各地で様々な取組が試されています。例えば、仕事が忙しくても仕事場やその近くでスポーツができるように、まちなかでのランニングステーションの整備、オフィス街やデパート等での体力測定やスポーツ体験、職場へのスポーツトレーナーの派遣、仕事終わりの人が参加しやすいよう、ナイトランイベントの開催など、ユニークな取組が進められています。

また、子育てで忙しい人には、小さい子どもと親と一緒に楽しめる体操教室や、小中学生の子ども

と親が参加するランニング教室、サッカー教室等も最近では珍しくなくなってきました。

かくなる私自身もスポーツがなかなか実施できていない日常を過ごしていますが、最近「行けそうかな」と思った時間があれば、インターネットで、リアルタイムに空きがあるコートを見つけて即予約。子どものトレーニングを兼ねてテニスに出かけることもあります。

スポーツ実施率をしゃかりきになって上げることにはいささか疑問もありますが、少なくとも体を動かすことで、心身の調子が整い、家族との時間も作れたりするのであれば、巷のスポーツ熱に便乗?して、少しは体を動かしてみたい、と思います。みなさんはいかがでしょう?



オフィス街で開催される MARUNOUCHI SPORTS FES

地域に愛される王道のチームスポーツ「バレーボール」

竹内和巳

地域再生デザイングループ

こんにちは。社会人になっても性懲りもなくバレーボールを続けている竹内です。

私がバレーボールを始めたのは中学生なので、かれこれ10年以上になります。大阪に引越してきてからも、クラブチームに入って週末（があれば）練習に行っています。

まずはバレーボールの魅力を紹介したいと思います。バレーボールの特徴としては、①相手とコートがわかれていて（味方とのやり取りに集中できる）、②相手のコートに返すまでに3回までボールを自陣でつなぐことができる（味方の能力を引き出すことが重要）、③コートが他のスポーツに比べて狭い（コミュニケーションが取りやすい）、④1点ごとにプレーがきれるため、プレー間の時間が頻りにある（コミュニケーションの機会が多い）、などが挙げられます。

要するに、チームスポーツとして盛り上がるための要素がたくさん詰まっており、チームスポーツが好きな方にはもってこいのスポーツなのです！



このままでは、ただのバレーボール日記になってしまうので、地域に支えられている市民球団について少しお話しします。

少し前に、私の出身地である静岡県浜松市に「ブレス浜松」というバレーボールチームができました。このチームは、親会社がなく、パートナー企業の支援や入場料で運営する市民球団です。選手は地元の協賛企業等で働きつつ、夜に集まって練習をしています。また、地域の観光PR活動や、スポーツ教室なども行っています。バレーボールでも、地域の支えによって成り立つスポーツチームの運営がどんどん浸透していったら、もっとも地域の中で愛されるスポーツになるといいなと思います。バレーボールもサッカーのように、1つの企業でなく、地域に支えられる時代が来るのかもしれない。

ヒルクライム大台ヶ原 since2001

～その日、村は自転車一色となった～

原田稔

建築プランニング・デザイングループ

今年で16回目となる奈良県上北山村の「ヒルクライム大台ヶ原 since2001」は村の若者で構成される村づくり団体「ワーク21上北山」の提案で始まった地域おこしのためのイベントです。

日本百名山でもある大台ヶ原に設定された、約35キロメートル、標高差1・24キロメートルの急勾配な坂道コースを自転車で麓から一気に駆け上がるレースです。コースには世界遺産「大峯奥駈道」を有する大峯連山を眺める絶景が広がり、今年も村の人口の2倍の約800人の選手が大自然の中を駆け抜けました。

大会では村民の方々だけでなく村外からも多くのボランティアスタッフが参加し、前日には石拾いなどのコース整備が行われ、大会当日は早朝より沿道に出て応援するなど、



村をあげての素晴らしい大会となりました。

ヒルクライムは自転車（自転車以外の競技もある）で山や丘陵地に設定された上り坂をひたすら登りつづけるタイムレースのため、自転車も選手も軽量化が求められるとともに、コースの状況や選手の特性に合わせたギアの選択が重要なカギとなります。大会の知名度が上がるにつれて、大会以外の日にも試走のために上北山村を訪れる選手も増えてきているようです。

これからも大会を長く続けることで村の元気を醸成するとともに、村の中に自転車乗りの姿が増え、将来はヒルクライムのメッカとして全国にその名を発信していけるように応援していきたいと思っています。できればいつかは選手としても…。



自然を体感できる自転車の魅力

伊藤栄俊

サスティナビリティマネジメントグループ



雲海の十和田湖

私は、大学時代にサイクリング部に所属しており、今でも趣味で自転車に乗っています。

京都にいたころは、ロードレーサーで標高約760メートルの花脊峠によく上っていました。東京に来てからは、近くにいい峠がないので、ツーリング用の自転車で土日や連休に輪行（自転車をばらして専用の袋に入れ、電車に乗せて移動）して、東北や北関東の方に走り出かけています。

自転車の魅力は、じかに自然を感じられることと達成感です。先日は、八甲田山と十和田湖の方へツーリングに行ってみました。八甲田山も十和田湖も紅葉真っ盛りでとてもきれいでした。さらに、十和田湖の湖面



十和田湖畔を走行中

が雲海に覆われており、言葉にできない美しい景色でした。そして、その美しい風景は、坂を上り峠を越えた先にあります。美しい風景やきつい上り坂、快適な下り坂、吹き付ける風、自転車は全身で自然を感じられます。

この時のツーリングでは、走行距離が約180キロメートル、獲得標高約4000メートルと楽な工程ではありませんでしたが、だからこそ走り切った後の達成感は大きなものでした。

ここまでは、ツーリングの話でしたが、学生時代にはレースもやっており、一昨年には大台ヶ原ヒルクライムにも出場しました。最近はレースに出場する機会はありませんでしたが、来年は、大台ヶ原ヒルクライムに出場したいと思っています。

さて、京都に戻ったらまずは花脊峠に登りに行こうか。

しま山登山のススメ ～絶海の孤島「青ヶ島」を訪ねて～

中村孝子

企画政策推進室

日本には5島を含み6852もの島があり（日本統計年鑑（総務省統計局）、うち有人島は418あり、それぞれの島には、固有の自然、歴史、文化、そして暮らしがあります。

海外旅行もいけれど、広い日本をより深く知りたい、いつか日本中の島巡りをしたいと思っています。大学時代、バックパッキングクラブに所属し、全国の山を登ってきた私ですが、ここ数年、登山を休んでいました。近年の山ガールブームもあり雑誌等に触発され、最近では京都トレイルにチャレンジしています。さらに島巡りをしたい思いとあいまって、この夏から「しま山登山」を開始することにしました。

「選ばれし者だけが上陸可能」のキャッチコピーと二重カルデラを持つ島の全景に心を奪われ、青ヶ島（大凸部・標高423メートル）を目指すことにしました。伊豆諸島にある火山島の青ヶ島（東京都青ヶ島村）は一村一島で日本一人口が少ない村です。島にアクセスするには、八丈島からヘリ（予約困難）、あるいは就航率が5〜6割の定期船で渡るため、上陸は天候に大きく左右されます。ヘリで広大な海の雲の切れ間から突如、現れた断崖絶壁の島の姿を目の当たりにすると思わず息を呑む



青ヶ島全景：周囲は断崖絶壁で二重カルデラの外輪山が絶景（ホームページより）

でしまいます。

当初の計画では2泊を予定していましたが、台風が接近してきたので急遽1泊に変更し、暴風雨の中、ヘリの臨時便により一髪で脱出できました（逃すと4日間足止めされるところでした）。大凸部の標高は低いけれど、簡単にはたどり着けない島の最高峰を登るといって達成感に格別で、まさに「しま山登山」の醍醐味といえます。

その一方で、集落の散策、独特の方言の島の人たちとの会話も楽しく、またヘリで島入りした大半は女子で、いわゆる島ガールカルチャーを感じることもできました。

次は、どこに行くか、（公財）日本離島センター発行の日本の島ガイド『SHINADAS（シマダス）』や「しま山100選」を眺めてプランを練っています。

「文化芸術立国」に向けた西日本の取組

江藤慎介：

地域産業イノベーショングループ

オリンピック・パラリンピックは「スポーツの祭典」であると同時に「文化の祭典」としても知られています。特に2012年のロンドン大会では、イギリス全土で18万件の文化プログラムが実施されたことで注目を集め、2020年の東京大会でも全国津々浦々で20万件の文化プログラムを実施する予定です。

なぜここまで文化芸術に注目が集まっているのでしょうか。文化芸術は創造性の源泉であり、また相互を理解し多様性を受け入れる土壌となつていますが、それだけではありません。人口減少社会が到来し、全国で地方創生の取組が進められる中、近年では文化芸術資源を活用した経済活性化（文化GDP）や、教育・福祉・まちづくりにおける社会的課題の改善、社会的包摂など、文化芸術が生み出す社会への波及効果に対する期待が高まっています。また、平成29年6月には「改正文化芸術基本法」が成立し、その中で地方公共団体は「地方文化芸術推進基本計画」を定めることが努力義務として定められています。日本全国で「文化芸術立国」に向けた機運が高まっています。

西日本の自治体でも、文化芸術を活用した様々な取組が始まっています。「スポーツの秋」と並ぶ「ゲージョウの秋」に、皆さんも久しぶりに文化芸術に触れてみてはいかがでしょうか。（以下、弊社が関わった自治体の面白い取組をご紹介します）



錦帯橋芸術祭（錦帯橋と篝火）

■錦帯橋を背景とした芸術祭の開催 ／山口県岩国市

世界に類のない木造橋「錦帯橋」が架かる岩国市は、平成27年12月に「岩国市文化芸術振興条例」を制定、翌年3月に「岩国市文化芸術振興プラン」を策定しました。「文化芸術が彩るこころ豊かなまち」世界へ、そして未来へ」の実現に向け、重点プロジェクトの一つとして「錦帯橋千年プロジェクト」に取り組んでいます。錦帯橋の架け替えに係る技術継承等を通じて、市民の自信や誇り、アイデンティティの確立につながるため、また錦帯橋の魅力を高め、観光等につなげていくため、平成28年11月にシンボルプロジェクト「錦帯橋芸術祭」が文化庁の補助事業等を活用して開催されました。篝火に照らされた錦帯橋を背景に、特設ステージでの演奏など様々な文化イベントが実施され、市民や観光客が楽しみました（平成29年11月

に第2回を開催）。（弊社は条例制定及びプラン策定支援等に携わりました）

■オーケストラが主導する社会的包摂の取組／大阪府豊中市

平成29年1月にグランドオープンした「豊中市立文化芸術センター」は、指定管理者の共同事業体として日本センチュリー交響楽団が携わっており、その画期的な運営体制に注目が集まっています。楽団は「音楽あふれるまち」をめざす豊中市と連携し、「とよなか音楽月間」等に取組んできましたが、他にも「音楽創作ワークショップ」を通じて若者の就労を応援するプログラム「The Work」や、楽器に触れて体感する「Touch The Orchestra」、ブリティッシュ・カウンスルと連携した「音楽を通して高齢者の生活の質の向上を目指す国際連携プログラム」等の社会的な取組を実施しています。また、豊中市南部の庄内地域では、当楽団や大阪音楽大学、市民活動団体等と連携し、音楽家と市民や子どもたちが参加する「世界のしよない音楽祭」や「庄内つくるオンガク祭」が行われています。

このような取組から豊中市は、平成27年度に大阪府内で初めて文化庁長官表彰（文化芸術創造都市部門）に選出されました。今後も（仮称）豊中文化ファン্ডを活用した文化芸術振興等に期待が寄せられています。（弊社は豊中市文化芸術推進プラン策定や改訂に携わっています）

■こどもを中心とした創造都市の推進／香川県高松市

かつて「讃岐の芸どころ」として栄えた高松市は、2010年から始まった「瀬戸内国際芸術祭」の開催地として賑わいを見せています。「瀬戸芸」の経済効果は100億円以上と言われていますが、波及効果はそれだけではありません。瀬戸芸をきっかけとした移住者による新しい取組が続いており、観光客を迎える新しいホテルの開業や、現代サーカスを基軸とした国際創作サーカスフェスティバルの開催等が進んでいます。また、瀬戸内海に浮かぶ男木島では、Uターンが進んだことから、廃校の小学校が再開しました。

こうした高松市では、平成25年に「高松市創造都市推進ビジョン」を策定しました。当ビジョンの特徴として、創造都市の推進の分野として「こども」を位置づけていることが挙げられます。その代表的な事例として、高松市ではイタリアのレッジョ・エミリア市の取組を参考に全国に先駆け、保育所・幼稚園に芸術士を派遣する「芸術士派遣事業」が実施されています。絵画・彫刻・パフォーマンス・デザイン・工芸など、様々な分野で表現活動する作家は、子どもたちの感性や創造性を引き出す「芸術士」として、市内40の保育所・こども園・幼稚園で活動しており、芸術士の活動は市外・県外にも広がっています。（弊社は高松市創造都市推進ビジョン策定に携わりました）

空き家をまちづくりの資源・きっかけに ～マルチステークホルダーで対応していく空き家対策～

戸田幸典：
地域再生デザイングループ

空家特措法施行後、全国各地で空き家に対する取組が進められており、対策計画を策定する自治体も増えています。

現在、倉敷市空家等対策計画の策定業務に携わっており、今年度中の計画策定に向けて、特措法で求める9項目にそった空き家対策の施策について、庁内での横断的な協議、そして外部有識者等による協議会によって検討を進めているところです。

民間の資産でもある空き家によりまちに生じてくる問題は、市民・事業者・行政等（マルチステークホルダー）が一緒になって取り組んでいくことが重要です。そこで倉敷市では、マルチステークホルダーでの取組を進める基盤づくりと空き家所有者や将来所有者になる方へのアプローチ方法（啓発や相談）をポイントにして計画検討を進めています。

「空家とまちづくり」車座ミーティングを開催

「マルチステークホルダーで対応していくしかけづくり」として、第1回車座ミーティングを10月11日に開催しました。これは空き家の問題に関わる多様な人たちが参加し、スピーカーと来場者がともに話し合う場で、その議論内容を計画に反映していくだけでなく、計画策定後のまち全体での空き家対策の体制づくりにつなげようという企画、実施しているものです。



以降もその特性やポテンシャルが異なる地域・地区ごとで継続して開催していくなど、ネットワークとマルチステークホルダーでの取組体制づくりの場として活かしていくと考えています。

倉敷市はそれぞれに歴史や地域性が異なる4地域と4地区からなっています。その特性も踏まえつつ、第1回は市全体のまちづくりを視野に、岡山大学大学院氏原岳人准教授の話題提供からスタート。さらに6人のスピーカーから、「茶屋町地区での空き家の地域拠点化活用」、「岡山での空き家相談機能」、「児島や玉島での古民家再生・活用」、「水島地域での空き店舗等活用によるエリア活性化」、「市による空き家対策等」の状況や課題認識をお話いただき、参加者同士でも議論を交わしました。

12月には第2回として対策計画素案を元にしながら、「空家の情報把握と啓発・相談機能」と「空家活用に必要環境整備（仕組み・担い手・制度）」を具体テーマとして示し、市民や事業者等が取り組んでいくべきこと、そのために行政がすべきことについての話し合いを予定しています。来年

住宅地の外構にみられる景観資源を調査しています

水谷省三：
都市・地域プランニンググループ

神戸市東灘区の山麓部に位置する本山北町地区は閑静な住宅地で、阪神間を代表する「山の手の住宅地」として上質な住宅が集積しています。

地区内には、大正期に開発された住宅地もあれば、高度経済成長期に開発された住宅地もあり、開発時期は様々ですが、斜面地形に沿って、質の高い外構の設えなどによる、深みのあるまちなみが形成されています。

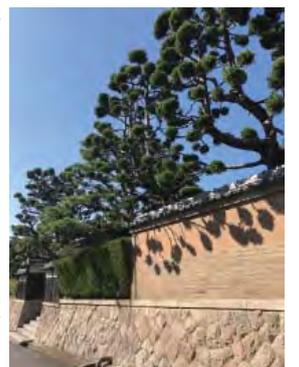
これらの住宅地景観の外構を特徴づけるものとして、斜面地を造成する際に造られた石積み擁壁と敷地内に配置された高木植栽や生垣などの豊富な緑があげられます。

地区内に多数見られる石積み擁壁には、錆御影（鉄さびのよ）うな褐色の色合いをもつ花崗岩）を用いた石積みが多く使われています。自然な風合いの



カイツカイブキの生垣と錆御影の石積み

野面石や間知石などの石積みが見られるまちなみは、重厚な印象を感じさせるものとなっています。また、高さが高いものでは二段、三段と積み方を変えて重ねるものもあり、様々な石積み表情が見られます。



築地塀越しの植栽

一方、植栽の特徴は、道路に面した生垣や築地塀の奥に見られる高木植栽など、奥行きを感じさせることです。また、門扉や塀の背後に見越しの松が植えられていたり、大きく育ったヒマヤラズギが綺麗に剪定されて象徴的に配置されるなど、手間をかけて美しく管理されている様子が見られます。日当たりのよい山側の南側敷地に植栽地が連続している様子も、まちなみの特徴と言えます。

今回の景観資源調査は、住宅地のまちなみを構成する外構に見られる石積み擁壁の石の形状や積み方、植栽の配置などを把握するものです。開発時期や地形の特性等を加味し、阪神間の上質な住宅地に見られる深みのあるまちなみの秘密を解き明かしたいと思っています。

加西市に來たれ外国人観光客

～地方都市におけるインバウンド観光の可能性を探る～

片山麻衣：

地域産業イノベーショングループ

兵庫県加西市では、現在、観光推進基本計画策定の一環で、インバウンド観光の展開について検討しています。

兵庫県では、神戸、姫路、城崎の3カ所を結ぶ周遊コースを「ひょうごゴールデンルート」と名付け、訪日外国人へのアピール強化を進めています。姫路城では平成27年のグランドオープンの効果もあり、外国人旅行者数は約36万人（平成28年度）となつています。今回は、今後加西市にも外国人観光客が訪れる可能性を考え、市内の観光地のニーズ等を把握するためのアンケート調査を実施しました。

■インバウンド観光に関するアンケート調査

8月末に姫路市に來訪した外国人観光客を対象に、JR姫路駅前でタブレット端末を用い、加西市内にある観光地の写真、説明を見せながら、アンケート調査を行いました。調査結果をみると、欧米からの來訪が多く、フランス人はお寺、ドイツ人は酒蔵などの來訪意向が強いなど、国別で観光地への関心度が異なることが分かりました。

■外国人を対象としたモニターツアー

10月中旬に加西市内にある観光地を巡



酒蔵「ふく蔵」での昼食



「法華山一乗寺」でのガイドの様子

るモニターツアーを開催しました。当日は、残念ながら雨となりましたが、外国人15名の参加のもと、ボランティアガイド等の案内で西国三十三所の一つである法華山一乗寺、兵庫県立フラワーセンター、北条鉄道等を巡り、酒蔵「ふく蔵」では日本酒の試飲、地元野菜を使った料理を楽しんでいただきました。参加者からは、特に法華山一乗寺の評価が高く、「オカリナの演奏を聴きながら、歩くのがよかった」、「三重塔、景色がきれいだつた」などと喜んでいただきました。

加西市は、交通アクセスが不利であるなど、インバウンド観光の推進には、課題がまだまだありますが、魅力的な地域資源が数多くあり、どのようにして外国人観光客に伝えていけばよいか、今後検討を続ける予定です。

なお、この業務は地域産業イノベーショングループの原田弘之も担当しています。

「景観読本」ができました

中井翔太：

都市・地域プランニンググループ

景観づくりにおいて、望ましい建築デザインのあり方があらかじめ定まっているような地域は殆どありません。読者の皆さんの中には日頃、そのような問いに悩みながら建築設計や関連する業務に携わっておられる方も少なくないでしょう。

「周辺のまちなみと調和のとれた建物となるよう努めてください。」みなさんはこの非常に曖昧な要求に対し、どのように答えられるでしょうか？

今年の10月に大阪市の景観計画が改訂されました。市域を市街地特性に応じて、詳細に区分し、よりきめ細やかな景観形成を図るといふ趣旨です。アルパックでは、この改訂と景観計画に関する届出マニュアルである「景観読本」づくりをサポートさせていただきました。

大阪市の「景観読本」は、建築物を設計する敷地の特性や周辺景観の読み解き方、景観形成方針を踏まえたコンセプトメイクの例、景観形成基準の解釈例などを丁寧に紹介しているのが特徴です。

とてもお節介な内容ですが、大阪市の市街地は多様で、目指す景観像が明確でないことから、景観形成における具体的な方向性と定量的な配慮事項を示

すことが困難です。そのため、景観計画には、前述のような抽象的・定量的な配慮事項（景観形成基準）が散見されます。抽象的・定量的な基準についてはその解釈と設計への落とし込み方に一定の幅が生じるため、参考例を通じて基準に込めた意図を示すしかありません。

この「お節介」は、単に基準の遵守を求めるだけでなく、設計者の方々との対話（協議）の中でその敷地にふさわしい景観について考えていきたいという大阪市のスタンスを表しています。景観計画の協議の際に限らず、皆さんが大阪の景観について考えたり、お話をする機会にも役立つ内容になっていきます。是非、一度手に取ってみてください。



この混沌の中でのいかに建築すれば良いのか

地元の企業や産品を見て、知って、自慢しよう

高田剛司：

地域産業イノベーショングループ



色とりどりのマンホールの蓋の展示

最終日は台風22号の接近による大雨で、あいにくの天気になってしまいました。それでも大勢の市民が訪れ、特に就学前児童から小学生ぐらいまでの子ども連れが多かったのが印象的でした。

当日、ものづくり企業のブース会場を廻つてみると、いわゆるインスタ映えのする展示に出会いました。カラフルにデザインされたマンホールの蓋を展示している鋳物企業の紹介ブースです。出展企業の方にお話をうかがうと、鋳物のまち・川口を発祥の地として、現在も本社があり、工場は県北部とのこと。全国各地のマンホールの蓋を製造し、この会社と中国地方のメーカー社で国内シェアの多くを占めているということでした。

川口といえば、吉永小百

埼玉県川口市のSKIPシティで、「川口市産品フェア」が10月27日(金)～29日(日)の3日間開催されました。



※今年度、アルパックでは川口市産業振興指針策定のお手伝いをしていきます。



「兵庫県林業会館」をCLTで建て替える

三浦健史：

建築プランニング・デザイングループ

※本事業の詳細は事務局ホームページに記載しています。(http://hyougo-clt.com/)

戦後に植林した杉が利用期を迎えています。都市の木質化に向け、兵庫県林業会館では、県産材CLT (Cross Laminated Timber) を活用した建替事業を進めています。

■防火地域に5階建て木造ビル

最近では、CLTを活用した建築物もいくつか事例が出ていますが、本プロジェクトでは、防火地域に5階建ての事務所ビルを床も含めて主要構造部をCLTで建てるという点に特徴があります。1層はRC、2～5層でCLTを使う計画です。

CLTは比較的新しい材料のため林野庁、環境省等の補助等も活用し、床の2時間耐火の実証試験や竣工後の断熱検証も計画しながらプロジェクトが進められています。

■CLTを見せる／使用木材量

検討の中で、様々な課題が明らかになりました。事務所の大スパン確保もその一つですが、一番は、せつかく使うCLTを見えるようにできるかどうかです。一方で、CLTを(鉛直力を受ける)構造として使う(木材量を増やす)と耐火のため隠す必要があり、トレードオフの関係で、ジレンマになっています。

■プロセスを透明化して普及・啓発を図る

実施設計・施工については一括発注プロポーザルを行い、審査が先日行われたところです。審査過程では先の二択が議論され、結果的には、CLTが見え普及性の高いハイブリッド構造の提案が選定されました。

また、プロポーザル前には、設計者だけでなく、森林・木材関係者も参加し、本事業を題材に五十田博氏(京都市大学生存圏研究所)、金箱温春氏(旬金箱構造設計事務所)、安井昇氏(桜設計集団一級建築士事務所)の各先生のご講演による勉強会を3回開催しました。今後も見学会等を開催する予定です。

アルパックは事務局として、基本計画・基本設計、補助申請、プロポーザル手続き、実施設計・施工監理・モニタリングの技術支援等を行っています。

※本業務は、三浦の他サスティナビリティマネジメントグループの畑中、中川、建築プランニングデザイングループの原田、塗師木も担当しています。



これまでの50年への感謝とこれからの50年に向けた決意 「アルパック創立50周年記念フォーラム」を開催しました

中塚一

創立50周年記念フォーラム実行委員長

さる10月14日寒露の候、京都・宝ヶ池の国立京都国際会館にて、アルパック創立50周年記念フォーラムを開催しました。当日は秋雨の中、各界から約250名の多彩な方々にご来場いただき、所員一同を代表し、実行委員長として御礼申し上げます。

同フォーラムのプログラムは、「持続可能な地域づくり～暮らし・つながる～」をテーマに、尾池和夫氏（京都造形芸術大学学長・第24代京都大学総長）の〈基調講演〉、上治太紀氏、木本勝也氏、中井優紀氏、宮川徳三郎氏の30～40代のまちづくり人による〈スパイラル・トーク〉、50年のアルバム、アルパック所縁の製品によるビンゴ大会、JAZZ演奏等の〈交流会〉と、格式ある空間での手作り感のある内容でした。ご参加いただいた皆さんが、これまでの50年への感謝の気持ちと今後の50年に向けた第一歩の小さなチャレンジを感じていただけたなら幸いです。特に、基調講演の最後に尾池先生よりいただいた次のようなメッセージが印象的でした。「持続可能性という言葉は要注意です。求めるべきものはこれまでのような経済発展や現在のままの快適な生活環境ではなく、自然の運行にさらわれない暮らしのあり方です。『節度を保って美しい

化石を残そう』をこれからの地球に暮らす人々の合言葉にしたい。」

さて私事ですが、私は約30年前、創立20年頃にアルパックに参画しました。その当時、企業25年説を諸先輩から聞かされ、後5年で身の振り方をどうにかしなければならぬと思っていた次第です。その後、25周年、50周年と立ち合い、今一度、創設時のベンチャー精神に戻り3度目の創業を目指すために、アソシエイツとしての組織のあり方、「仕事」から経済的報酬の有無に関わらず社会に貢献し、時間や労力を費やす「しごと」への意識転換などを、メンバー全員で再度見直していく節目にしていきたいと考えております。

今後ともよろしくご指導、ご鞭撻のほどお願い申し上げます。



地域に寄り添って地方創生を考える 番外編

これまでの連載を小冊子「人口減少に抗して」にまとめました

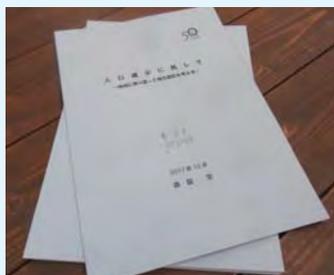
森脇宏：
代表取締役社長

アルパック創立50周年記念フォーラムの来訪者の皆様へのお土産として、これまでレターズ・アルパックに連載してきた「地域に寄り添って地方創生を考える」を編集し直し、小冊子「人口減少に抗して」を取りまとめました。

地方創生の最も中心問題は「人口減少」ですので、これに正面から挑んでみようという無鉄砲な問題意識で勉強を重ね、レターズ・アルパックに連載し続けてきました。これらを編集し直すとともに、新たに書き起こした部分も2割程度あります。

まだ残部が幾らかありますので、ご希望の方にはお一人一冊お送りすることができます。まだまだ考察を深めるべきところも多いと認識していますが、問題提起のつもりで書いてきました。今後、より深めていきたいと思っておりますので、いろいろ

ご批判いただければ幸いです。入手ご希望の方は、A4版が入る返信用封筒（宛名を記入して切手250円分を貼ってください）を、「『人口減少に抗して』入手希望」と記したメモとともに、我が社の大阪事



務所にお送りください。随時お送りいたします。

なお、小冊子の目次（構成）は次のとおりになっています。

【目次（構成）】

- はじめに
- 第1部 社会減に抗して
1. 考察の視点
 2. 教訓を考察する自治体
 3. 大津町に関する考察
 4. 川北町に関する考察
 5. 東根市に関する考察
 6. 南風原町に関する考察
 7. ニセコ町に関する考察
 8. 東川町に関する考察
 9. 恩納村に関する考察
 10. 小括（地方部の人口増加市町村に学ぶ）
- 第2部 自然減に抗して
1. 考察の視点
 2. 出生率に影響を及ぼす要因
 3. 女性就業率が高いことの意味について
 4. 女性就業率に影響を及ぼす要因
 5. 小括（少子化緩和策の試案）
- おわりに

近況 & イベントのお知らせ

「イノベーション・キュレーター塾」を卒塾しました

江藤慎介
地域産業イノベーショングループ

平成28年9月から平成29年7月までの約1年間、京都市ソーシャルイノベーション研究所が主催する「イノベーション・キュレーター塾」に第2期生として入塾し、無事に卒塾しました。

京都市では、平成23年度より、様々な社会的課題をビジネスの手法で解決するソーシャルビジネスの支援に全国に先駆けて取り組んできました。こうした中、平成26年度に「京都市ソーシャル・イノベーション・クラスター構想」を取りまとめ、その推進拠点として公益財団法人京都高度技術研究所内に京都市ソーシャルイノベーション研究所を設置。「これからの1000年を紡ぐ企業認定」や「ソーシャル・イノベーション・サミット」の開催や、社会的企業の京都誘致等に取り組んでいます。

このような取り組みのひとつが平成27年度から実施している「イノベーション・キュレーター塾」です。経営者とともに社会的な課題をビジネスの手法で解決するため、多様な情報の海から未来を実現するための鍵を拾い上げる力を持った「キュレーター」が大切になります。当塾では、フェアトレードのセレクトショップ運営等に取り組む(株)福市代表取締役の高津玉枝氏を塾長に迎え、ゲストスピーカーとのセッション等から学ぶとともに、塾生一人ひとりが「マイプロジェクト」を探求するプログラムとなっています。これは単に知識を身につけるだけでなく、自ら実践することで、キュレーションに必要な、問いを立て、答えを導き出す「型」が身につくという考えによるものです。

私が入塾した第2期では、大和総研の河口真理子氏からSDGsやパリ協定、ESG投資等の世界情勢を学び、またNPO法人スマイルスタイル(平成29年10月にNPO法人ハローライフへ法人名称変更)の塩山諒氏やパタゴニア日本支社の辻井隆行氏からはローカル/グローバルでのソーシャルビジネスの実践を学ぶなど、充実したプログラムが展開されました。また、高津塾長や、研究所長の大室悦賀氏(京都産業大学教授)、塾生同士からの厳しい意見をもらいながら、塾生自身のマイプロジェクトを磨きました。ちなみに私は、「まちづくり」という名前の“潜水艦”(=潜水艦の中の常識が、潜水艦の外では通じない世界)からなかなか抜け出せず、私自身が業界の沼地に嵌っている現状を改めて認識しました。

世界だけでなく国内でも、徐々にソーシャルビジネスの輪は広がっています。既に平成29年9月からは第三期「イノベーション・キュレーター塾」がスタートしています。あなたも持続可能な社会の実現を目指す、“四方よし”(三方よし+未来よし)ビジネスの支援者になりませんか?



チャレンジャー求ムー村ではたらく・つくりだす 座談会&体感合宿プログラムを開催しています

中川貴美子：
サステナビリティマネジメントグループ

日本百名山大台ヶ原の麓にある奈良県上北山村(人口約530人弱)で、数年前よりサイクリストが集う村づくりのお手伝いをしています(詳細は3ページ参照)。現在、村では、休業中の宿泊施設をサイクリストや村民、大台ヶ原に観光に訪れた方が集い、また宿泊する施設へ再生する取り組みを行っており、ハードの検討とともに、村での運営組織立ち上げも検討しています。そこで、一緒に働いてくれるメンバーを募集することになりました。

募集にあたっては、大阪(11/9,11/17,11/25)、東京での説明会(11/15,11/19)、また、上北山村について体感していただく1泊2日の合宿(12月、1月実施予定。現在参加者募集中)を経て、エントリー、採用というプロセスを進めています。自分のスキル・興味(デザイン、自転車、野外学習、アウトドア、奥地

でのチャレンジ等)を活かしながら、村の宿泊・観光施設の再生に携わる、例えば自転車のプロを目指す若者が、急峻な坂で週の半分は練習に費やし、半分は村の施設で働く、そんな新しい働き方も模索しています。詳しくはこちらをご覧ください。

<https://www.facebook.com/challengekamikita/>



嶋崎雅嘉：
地域再生デザイングループ



傘の花が咲き、虹の橋がかかった 桂ヴィレッジフェス

今年の秋は、週末ごとに台風が来るなど天候に恵まれず、全国的に様々なイベントが順延になったり中止を余儀なくされたりしました。

そのような中、雨天対応に苦慮しながらも開催されたイベントも多くありました。

阪急桂駅(京都市西京区)近くにある西山別院で開催された「桂ヴィレッジフェス」もその一つ。

私も実行委員の一人としてかわっているイベントです。

秋晴れの青空のもと「ステージエリア」の音楽を楽しみながら、地域の魅力的なお店の出店による「カフェエリア」「ワークショップエリア」などが軒を連ねる予定でしたが、日本列島に迫ってくる台風の影響で朝から雨模様の日となったため、あらかじめ準備していた雨仕様のレイアウトとなりました。

銀杏の木の下で繰り広げられる予定だったステージは、西山別院の本堂で行われ、厳かな雰囲気の中でクラシックやジャズが演奏されました。

桂駅周辺の魅力的な飲食店を集めたカフェエリアは雨の中予定通り出店し、お客様は西山別院の研修施設内で美味しい食事を楽しみました。同じ室内には、「一箱古本市」も移動してきており、雨仕様の



のレイアウトならではのブックカフェとなりました。

雨で水たまりだらけになった境内に目を向けると色とりどりの傘の花が咲き乱れ、本堂の軒下では、雨音をバックにくつろぐ人たちの姿が見られました。

イベントは晴れば8割成功などといわれるにもかかわらず、実行委員会のリーダーは「恵みの雨」と話していたのがステキです。

そして、フェスの終了時間に合わせて、一瞬雨が上がり晴れ間がのぞいたかと思うと、東の空に大きな虹の橋がかかるというドラマティックな演出に、来訪者も実行委員にも笑顔が広がりました。雨のイベントもなかなか楽しめるものです。

<https://www.facebook.com/katsura.village/>



「レターズアルパック」は、ホームページからもご覧いただけます。

アルパック (株) 地域計画建築研究所

Architects Regional Planners & Associates・Kyoto
<http://www.arpak.co.jp> E-mail: info@arpak.co.jp

本社・

京都事務所 〒600-8007 京都市下京区四条通り高倉西入立売西町82 TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764

大阪事務所 〒541-0042 大阪市中央区今橋3-1-7日本生命今橋ビル10F TEL(06)6205-3600 FAX(06)6205-3601

名古屋事務所 〒460-0003 名古屋市中区錦1-19-24名古屋第一ビル6F TEL(052)202-1411 FAX(052)220-3760

東京事務所 〒102-0074 東京都千代田区九段南3-5-11スクエア九段ビル1F TEL(03)3288-0240 FAX(03)3288-0221

九州事務所 〒810-0802 (株)よかネット:福岡市博多区中洲中島町3-8福岡パールビル8F TEL(092)283-2121 FAX(092)283-2128



この用紙は「びわ湖の森を元気にする」
Kikitoペーパーを使用しています。